

メタ理論としてのディルタイ心理学

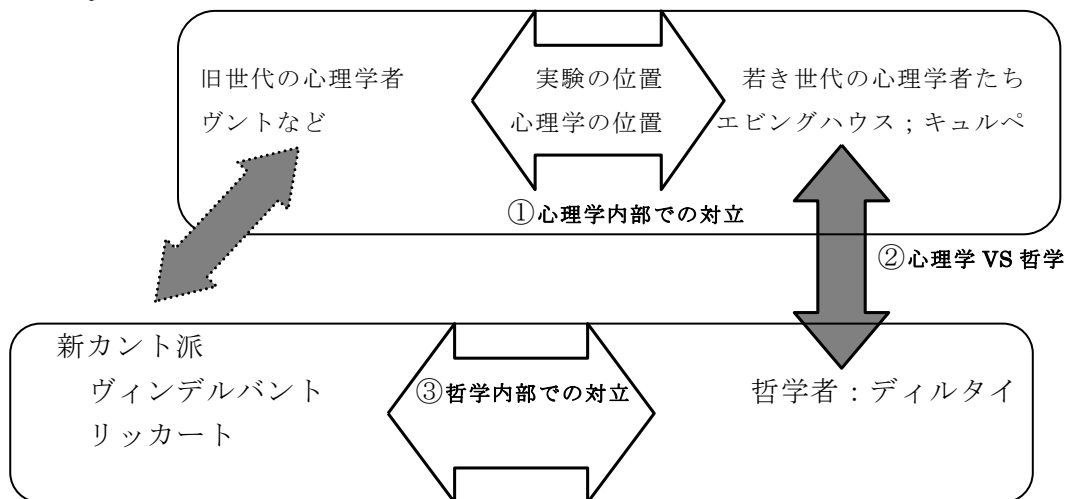
伊藤直樹 (Naoki Ito)
法政大学非常勤講師

本発表のねらいは、「心理学・人間科学メタ理論」をめぐる考察を、歴史的次元から深めることにある。そして、ここでは19世紀末の心理学（とくにドイツ）の状況をひとつのフィールドとして考察を重ねたい。

なぜ心理学のメタ理論をめぐる、この時代を振り返るのか。現在、心理学の状況は、新たな理論の登場によって多様化断片化をたどっていると言われる。しかし、19世紀末の心理学の状況はそれ以上だったと言えるだろう。なぜなら、この時代は、心理学が科学として成立しようとする時期だったからである。現代において、諸理論の対立がどれほどあろうとも、それは心理学それ自体の存否には及ばないであろう。しかし、この19世紀末という時代は、心理学が科学としての存立そのものを問われていた時代である。言い換えれば、心理学とは何かということが問題となった時代、すなわち心理学のメタ理論的問いが、現在より以上に、喫緊だった時代である。本発表で、この時期に焦点をあてるのはこのような理由による。

考察は次のような手順で行ないたい。

まず第一に、19世紀末の心理学の状況の見取り図を描いておく。このとき、重要になるのは、心理学と哲学との関係である。心理学が科学として成立するということは、心理学が哲学、ないしは哲学部から分離独立するということである。ここには、学の理論的な整備だけでなく、継続的な資金に裏打ちされた実験室の運営や学位の授与などの制度的な側面も不可欠となる。そして、このプロセスで、いくつかの戦線が形成される。それは、①哲学と心理学との抗争、②心理学内部での新旧対立、③心理学の位置づけをめぐる哲学内部での対立の三つをあげることができる。次のように図示できる。



これらの戦線はみな、ひとつの同じ問題によって貫かれている。それは、心理学を哲学から切り離すか否かということである。例えば、「若き世代の心理学者たち」は、心理学を実験心理学とみなし哲学の支配から脱しようとした。他方で、「新カント派」は、心理学を「法則定立的な学」とみなすことによって、歴史科学への心理学の侵入を回避し、哲学の超越論的な学としての地位を保持しようとした。しかし、「ディルタイ」は、そしてまた「ヴント」も、前二者とは異なった立場に立っていた。心理学と哲学との結びつきを維持しようとしたのである。心理学と哲学との結びつきを維持するとは、心理学に対するメタ理論的問いを保持するということである。しかし、その後の心理学の展開は、「若き世代の心理学者たち」の道をメインストリームとして歩んでいったと言ってよいだろう。つまり、心理学のメタ理論的問いは喪われていったのである。

考察の第二は、ディルタイの思想を、人間科学のメタ理論として読み解くことである。ディルタイのメタ理論的企てを、一言でいうならば「歴史的理性批判」ということになる。それは、精神諸科学（Geisteswissenschaften／「人間科学」）に相対的に独立した領域を確保し、その「理路」を与えることである。ここでの注意点は、一つには、ディルタイが実証主義の基礎となった帰納主義的な論理学を採らないという点である。そうした論理主義は、多くのものを切り落としてしまっているように思われた。そこで、ディルタイは、論理主義の背後に遡り、「生」の立場から諸科学を基礎づけようとしたのである。二つめは、ディルタイは、ここでその基礎づけの学として採用したのが、心理学だったという点である。つまり、言うなれば、心理学のメタ理論もまた心理学だということになる。もっとも、ディルタイの心理学は基礎学なのであるから、内実としては、心理学ではなく哲学であり、あるいは哲学的心理学であって、別の名称でそれを呼びさえすれば（例えばフッサールが「現象学」と呼んだように）、問題は解消されることになるという指摘もできよう。しかしディルタイはそうはしなかった。それどころか、心理学の経験科学的な側面も保持しつつ、なおかつ当時の自然科学化しつつあった心理学を批判しさえしたのである。（それが、エビングハウスからの批判をまねくことにもなった。）この背後には、心理学を「人間学」とも呼ぶ、ディルタイのスタンスがある。

第三の考察は、ディルタイの心理学を明らかにすることに向けられる。

そのさい、注目したいのは「体験」と呼ばれるものである。これは、ディルタイの心理学の基層をなす。ディルタイの言葉としてしばしば引かれるものに、「自然を説明し、心的生を理解する」というものがある。自然は説明の対象である。しかし心理学の対象はそうではない。心的生は、体験として根源的にわれわれに与えられている。したがって、心的生についての記述は「理解」である。ディルタイが「説明的心理学」あるいは「構成的心理学」と呼ぶ当時の自然科学化しつつあった心理学は、この点を顧慮しないまま、仮説を重ねるだけである。

以上の考察を踏まえ、ディルタイの思想が「心理学・人間科学メタ理論」に対して、どの程度寄与できるかということを経査してゆきたい。